

青丘文庫研究会 月報

No.277

2015年1月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西西部会 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として2000円/年をお願いします。

新年あけましておめでとうございます。

本年もよろしくお祈いします。

2015年正月



朝鮮近現代史研究会代表 水野直樹
 在日朝鮮人運動史研究会関西西部会代表 飛田雄一

<巻頭エッセイ> 体調不良と自炊 吉川絢子

今年の4月から、同志社大学コリア研究センターの嘱託研究員として韓国に滞在している。これまで3回、韓国での長期滞在を経験していることもあり、生活の面で大きな不安はなかったが、体調の面ではやや不安があった。というのも、大学院進学以来の不摂生が重なり、数年前から体のところどころに不調を来していたためであった。とは言っても、就職などのことを考えると、今後韓国に長期滞在できる機会は絶無に等しく、したがって体の不調を理由に機会を逃すことはできなかった。

このように体の不調を押し切って、韓国に来たわけであるが、やはり体というものは正直である。4月の到着以降も不調は続き、緊急治療室・外科・内科・皮膚科・整形外科・耳鼻咽喉科・漢方医など、日本でも通ったことのないくらい多くの病院に通うことになった。そして、病院に通うたびに医師たちからは「キミ、もっとしっかりご飯を食べないとだめだよ」と決まって言われた。最初は適当に聞き流すだけであったが、度重なるじんましの発症を機に、これまで不摂生であった食生活を見直すことになった。

食生活を見直すなかで最も改めるようになったのは、外食を控えることであった。外食は手軽に食事ができるという点では便利であるが、材料を確認することができないという点で大きな不安がある。とりわけ、じんましんが出したのが、決まって外食をした後であったこと、血液検査をしてもじんましんの原因が特定できなかったということもあり、外食はできるだけ避けるようにした。同様の理由から、スーパーで売っている出来合いの総菜についても、なるべく口にしないようにした。

その結果、市場に足しげく通うようになった。もちろん、市場に出回っている食材も完全に安心できる

とは言えない。農薬の問題、化学肥料の問題、産地偽造など疑いだしたらキリがない。しかし、外食をしたり、惣菜を買って食べたりするよりは、はるかに安全である。また、市場に売られている野菜や果物を眺めながら、季節の移ろいを感じたり、今夜は何を作って食べようか考えたりするのも、意外と面白い。市場のおばさんに「これ、どうやって食べるんですか」と聞いたり、料理好きの知人と材料や調理方法などについて話したりするのもなかなか楽しい。もちろん、市場に行くことや作って食べたりすることが、面倒臭いと感じるときもあるが、総体的に見ると楽しいと感じることの方が多い。体調については、まだまだ不安定なところがあり、先日もじんましんで難儀をしたが、以前に比べるとだいぶよくなってきているような気がする。

体調を崩したこと、それ自体は不幸なことである。また、体調不良の原因の大部分が自分の不摂生によるものであったことについては、深く反省をしている。韓国に来る前も、来てからも体調のことでは、本当に多くの人にご心配をおかけしていることについても、自分なりに十分に理解しているつもりである。しかし、体調を崩したことで、これまでほとんど気にしていなかったことが、徐々に目に見えるようになってきていることも事実である。この点で、体調不良には「感謝」をしている。

体調を取り戻すまでには、まだまだ時間がかかりそうではある。しかし、2016年3月の派遣期間終了までには、何としてでも体調を取り戻すつもりでいる。4回目の韓国長期滞在を終え、すっかり健康になった姿を日本でお見せできればと思う。

第348回在日朝鮮人運動史研究会関西部会（2014年4月13日）

「在日朝鮮人史学習に生かすための米騒動研究」 高野昭雄

本研究では、1918年の米騒動を、大戦景気中の象徴的な出来事として、さらには日本近代史の転換点として捉え直す作業を行った。脚気統計や残飯屋に関する史料など、従来の日本史研究では看過されてきた感のある史料をもとに、当時の日本における米を中心とした食文化を分析した。その結果、農村より漁村や都市、そして同じ都市でも東日本より西日本の都市で、白米を多食する傾向があったことを示した。そして米騒動は、漁師町・港町一帯での騒動を発端とし、西日本の都市部で最も激しい暴動となっていた。

産業革命が進行する中、白米食は都市貧困層にまで普及し、大戦景気時には、日本人が史上最も米を多く食べる時代を迎えていた。都市では最貧困層でさえ、主食物が残飯から白米へと変化していた。だからこそ、都市貧困層は米価高騰に不満を持ち、米騒動の担い手になっていったのである。残飯ではなく、米を多量に食べるようになったがゆえの米騒動、生活水準が上がったからこそその米騒動であった。

当日は、多くの方々より貴重な御助言をいただいた。報告を元に論文「1918年米騒動に関する考察—脚気統計と残飯屋から学ぶ—」（『千葉商大紀要』第52巻第1号、2014年9月）を発表させていただいた。皆様方に篤く御礼を申し上げます。

●朝鮮史セミナー連続講座『日韓歴史認識問題とは何か』講師：神戸大学大学院国際協力研究科教授 木村幹さん／
第1回 2月13日（金） 第一次歴史教科書問題とその発展過程／第2回 2月27日（金） 従軍慰安婦問題の発展過程とその言説／第3回 3月13日（金） ナショナル・ポピュリズムの時代における歴史認識問題
時間はいずれも午後6時30分～8時30分／
参加費：各回800円（学生半額） 会場・主催：神戸学生青年センター

第352回在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (2014年9月14日)

1970～80年代のウトロ地区をとりまく地域運動の芽生え —1970年代半ば～80年代半ばまでを中心に 全ウンフィ

本報告では京都府宇治市にある在日集住地域（以下、集住地域）ウトロ地区の1970年代～80年代における運動について、文化景観の地域的・時代的文脈と関連付けて述べた。ここで文化景観は地名や空間環境で構成され、見られる／まなざされる象徴的場を指す。不法占拠地域はその周辺を含めた地域住民にとっての日常的な場でありながら、在日が喚起する様々なナショナルな場（朝鮮半島、韓国、北朝鮮など）と連動した時・空間的に多様なまなざしを受ける。

ウトロ地区は集住地域のなかでも戦時期に形成された不法占拠地域で、社会・経済的に不利な居住環境および住民構成、そして排除的な文化景観を有する。1980年代後半から住環境に対する住民運動が展開されているが、その重要な担い手は日本人支援者である。ウトロに関する先行研究や既存の集住地域研究において日本人支援者の存在は周地的・補助的位置を占めてきた。本報告では彼らを動機付け、集合的な実践を可能にした様々な要素のなかで文化景観の時・空間的文脈とそれと関連する実践に注目する。前者は関連した既存研究や当時発行された雑誌などの文献資料を、後者はウトロで立ち退き反対運動が始まる前までの自主的活動に対する聞き取りを中心に調査した。

その時間的文脈はまず環境、女性、反戦運動など全共闘以後の多様な地域実践の一つとして「朝鮮問題」が展開されたという点である。在日2世と日本人学者層間の交流や戦前からの共産党系のネットワークのうへで、とりわけ1965年の日韓条約を契機に特定の非制度的言説が地域的・全国的に発信された（尹健次 2008）。その言説において在日や日韓条約前後の韓国人学生・労働者は日本社会の問題と捉えなおされ、朝鮮半島に対する非制度的な文化景観の言説が朝鮮歴史・文化や韓国における民主化運動の情報発信から実践された。その方法は学者による雑誌や書籍出版のほか、一般市民による自主的な学習集会の形で全国各地で展開されていった。

ウトロ地区の周辺（宇治市西部エリア）は60年代半ばから70年代において京阪神に通勤する若い世代の流入に伴って郊外都市化されている。日本人支援者のライフヒストリや地域における実践の内容にはこの空間的文脈と上述した時代的文脈が反映されていた。彼らは70年代後半からウトロ周辺地域において朝鮮・韓国に関する情報発信を地域運動間のネットワークのうへで展開し、それを基盤に80年代後半以後のウトロにおける住民運動を牽引した。

しかし彼らが活動を通じて実践した文化景観は集住地域の住民の日常的文化とは異なっていた。前者にとってウトロが「身近な朝鮮問題」のための実践の場であったとすれば、後者におけるウトロは民族的共同体というよりその時代の生活の記憶の場として働いた部分が大きいと考えられる。その生活の記憶は労働や地域における軟式野球などの「国民的」で非民族的な活動に支えられていた。

1970年代～80年代は高度成長期以後大きく変化した在日の文化景観が地域社会に行き届いていった時期である。ウトロ地区をとりまく地域運動もそのような在日の文化景観の実践として始まったが、後述するように地区内部の2・3世住民の日常生活の有り様とは場を目指していた。

第295回朝鮮近現代史研究会 (2014年9月14日)

「韓国における社会保障の形成—「独裁」「反共」国家から 「民主」「福祉」国家へ— (新幹社より2015年刊行予定) 金早雪

9月14日、青丘文庫月例会の発表に伺いました。文庫が市立図書館に移ってから初めての訪問です。図書館の案内図に「青丘」の記載が見当たらないのでカウンターで聞き、何やら「秘密の基地」の階(会?)かなと、「ウトロ」云々の声が漏れ来るドアをそっと開けました。熱心な論座は、報告者お一人が若さを際立たせていて、あとはほっとする同世代かそれ以上の、懐かしいお顔を含めて、20人ほどがおいででした。ほぼ毎月、土曜の午後に地道に研究会を続けておられることに、本当に感服するとともに、地方に住んでいるとそういう研究仲間が2ケタもいることはうらやましい限りです。

さて、報告は、表題の拙著についてです。内容は、これまでまったくブラックボックス状態だった韓国の「生活政策」(いわゆる社会保障)について、「救護行政」という名の下に、一定の近代的政策体系を持ちつつも、民間団体を含む外国援助を取り込んだ複合的な財源構造のもとで、居宅、施設、自助勤労(のち零細民)といった受給カテゴリー別の錯綜した構造にあったことを、「保健福祉部資料室」などで徹底収集した一次資料を読み尽くして実証したものです。問題関心は、「救護行政」がなぜ1990年代に至るまで維持されたのか、そして韓国の1980年代からの「民主化」が、冷戦体制の終焉とともに、最後は福祉改革に行き着くべくして行き着いたことの世界史的な意義を問いかけること、です。詳しくは、来年、本が出たら(高額になりそうなので)図書館などで手に取って頂ければ幸甚です。すでに、前半2つの章と資料研究4編のPDFが、信州大学経済学部サイトの『研究紀要』第63号、第65号に掲載されています。研究会では、30年ぶりにお会いしたH先輩が事前にこれらを読んで下さって、叙述が冗長気味ながら論旨はしっかりしているというお褒めを頂きとてもうれしく、信州から神戸まで出向いたかいがありました。飛田さん始め、御参加くださった皆様に御礼申し上げます。ではよい新年をお迎えください。(昨年中に原稿をいただきました。飛田)

●青丘文庫研究会のご案内●

■第297回朝鮮近現代史研究会 2015年1月11日(日)午後3時~5時

「北朝鮮開拓と中国人労働者(その2)—長津江水電工事」 堀内 稔

■在日朝鮮人運動史研究会関西支部はお休みです。

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。)

【今後の研究会の予定】来月以降の予定。2月8日、在日(塚崎昌之)、近現代史(未定)。3月8日、在日(未定)、近現代史(李景珉)。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで。

【月報の巻頭エッセイの予定】2月号以降は、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。